特別連載

佐伯と岡水田独歩

賛助会員　山内武麒

四（十二月の記）

—承前　引用文は「最かざるの記」—

一日（注　明治二十六年十二月）

此頃ウォーズウオースの「逍遥記」を読みつゝある也。

二十九日薄暮、独り櫨の路を散歩せり。天曇りて晩鐘雲にこだえ、村暗ふして燈未だ照せず。寂寞と里声とは吾をして感慨に堪えざらしめぬ。

吾は断じて真面目に非ざる也。これ嘆ず可きの変りならずや。先づ試みに思へ。最早かく浮薄に思想し、行為す可き時代にあらぬなり。思へ。両は心底の煩悶と不真面目を投入し去り得ると信ずる乎再び言はん。

両は決して真面目ならず、両はストラッグルせざる也。さりとて大信仰あらざる也。大智識あらざる也。大感激あらざる也。

この頃、独歩はウォーズウオースの「逍遥記」を読んでいる。

二十九日の夕暮に、独りで櫨の道を散歩している。櫨の道とあるから田坪道であろう。空は曇って、養賢寺の晩鐘の音が雲にこだまする。田坪の村は暗く、まだ明りもついてない。寂寞とその中から時折聞こえる村からの声は、深い感慨を催おさせた。

自分は真面目でない。まことに残念なことである。今はものを軽々しく考え、軽々しく行動にうつす時代ではない。考えて見よ、お前は心の中の煩悶と不真面目な考え方をなくすることが出来る自信があるか。お前は真面目でない、お前は心の中で葛藤していない。そうかといって信仰もない。智識も乏しい。ものに大きく感激もしない。と自分自身を深く反省している。

五日

二日と三日と四日とは過ぎ去りぬ。

二日は土曜日、三日は日曜日、土曜日の夜—鹿狩りに誘はれ、弟と妻と合して十名、桂港より乗船して猿渡と称する海前に着き、明くれば日曜日、終日野山に狩り暮らし其夜は猿渡に宿し、四日朝、妻等五名は陸地より徒歩佐伯町に帰る。

これは、小説「鹿狩」の主題となった日記である。この作は明治三十一年八月発行の、雑誌「家庭雑誌」に発表した小説で、独歩が二十八歳の時の作である。

「『鹿狩に連れて行かうか』と中根の叔父が突然に言ったので僕は狼狽した。『面白いぞ、連れて行かうか』。人の善い叔父はにこ〳〵しながら勧めた」

と書き出して、主人公の「僕」は十二歳の少年として書かれている。

そして同行する。集まった人は皆町の上流の人達で、中根の叔父は銀行の頭取であるし、判事もいるし、郡長もいた。その中で、今井の叔父さんが一番声が大きいし、一番元気があり、一番面白そうであった。また一番ふと

っているし、一番年を取っていて、僕が一番気に入った。

同勢十一人はその夜おそくかの宝港（葛港のことを）を船に乗って出発し、船の中で大人たちは早速酒盛りを始め、酔って みんな寝てしまう。そしてまだ夜のあけきらない中に、つの宮崎（鶴見崎）の浦まえに着いた。一軒の漁師の家で夜の明けきるまで休息し、鶴見崎の背の山に登り、加勢の猟師たちと一しょに、いよいよ猟が始まった。僕は今井の叔父の傍から離れずについて廻り、猟の様子を見物した。犬が鹿を追い出した。今井の叔父に教えられて鹿を見る。生きている鹿を見るのは初めてだ。その鹿が撃たれた。そばに寄って見ると、まだ角のない、たいして大きくない鹿であった。

時間が経って昼飯時になり、今井の叔父と草の上で弁当を食べた。叔父は腹にさげていた黒革の酒を飲み、弁当を食べ終ると草の上に眠ってしまった。この時、小藪の中がささがさしてこちらへ近ずくものがある。見ると枝のある大きな角が見える。大きな鹿だ。叔父を起そうと思ったが、起すと叔父の声で鹿が逃げてしまうだろうと思って、叔父の鉄砲をとってその鹿を射った。うまく当った。鉄砲の音で叔父が飛び起きたが、見事鹿を仕留めたのを見て、僕に抱きついて喜んだ。

一日中、山野をかけ廻って猟をして、六頭の鹿を獲た。僕のうった鹿が一番大きかった。帰りも今井の叔父と一緒に、陸を歩いて帰った。

それからその後の話。

今井の叔父さんの独り息子の鉄也さんが鉄砲腹で死んだ。この人は四五年前から気が違って、全く廃人になっていた。それでも独り子に死なれた今井の叔父さんは大層悲しんだ。

そこでこの僕が、今井の家に養子となって貰われて行った。

以上が「鹿狩」の荒筋である。

この小説に出る中根の叔父にしても、今井の叔父にしても、葛落で性格が明るく、ユーモアたっぷりに描かれてある。独歩は人間性に秘められるユーモアにも、心をひかれていたのであろう。

七日

詩人は円く想像し、俗人はひらたく想像す。故に寤し迷ひ、失ひ、而して遂に達せず、円く想像す。故に達せずと雖も窮せず茲に迷はずして自ら通ず。則ち達したる也。円き想像には必ず中心あり、否な中心自らあらはる、之れ神なり。故に大なる詩人は神きみる也。

而して此円き想像の固定したる者之れ彼の頑固にして生命なき神学及び信仰なり。詩人の円き想像は常に活動流転す。自ら生気あり。其の信仰は火の如く焔へ、泉の如く流るる者は其情なり。

これは、ものを想像すること、ものの考え方を述べたものであろう。

詩人は円く想像し、俗人はひらたく想像するとは中々穿った見方である。俗人はものをひらたく考えるから、行き詰って迷い、どうすればよいか解らなくなる。円く想像すれば、すぐに解けなくても、行き詰まることがないから、自然と解決の道が開けてくる。解ったと同じである。円い想像には必ずその考え方の中核となるものがある。いやその中核が必ず表われてくる。これは神である。だから、偉大な詩人は常に神を見ることが出来る。

この円い想像は、固定したものであってはならない。

常に活動し流動するものでなければならない。そうであれば生気が満活満ちている。そしてそこに生れる信仰は火の如く燃え、泉のように流れる熱情をもっている。

十二日

今日は十二日の夜已に十二時を打ちてやゝ過ぎぬ。十日は日曜日、此日は朝れ時頃家を出で延々の山谷に数多の村落を訪ひたり。其村落の名未だ一々これを知らず。はじめは般頭河岸の渡をわたりて堅田道に出で、右に折れて数村を訪ひぬ。番匠川と山麓と相接する処に至りて道窮す。あとがへりして再び堅田道に出で、終に柏江と称する村を訪い、食くすすみて下堅田村に至り茲に大道に遇ひすなはち帰路に就きぬ。

観得たる処何事ぞ。

即ち大塊の上に人間が生死するまのあたりの事実なり。生活の実際のかたちなり。

嗚呼さまざまの村にさまざまの人民住みなん。其浮沈如何。其一生の命運如何、其感情如何。其の高尚なる人情は如何。

吾は何故に村落の民ならぬか。吾が人生観宇宙観は村落の民と何らのハーモニイをたもつか。

嗚呼村落吾をしてしば〳〵これを見舞はしめよ。其処には、人間の生活の活印象を吾に与える新面目の存する村落！

罪もありなん。恋もありなん。生滅する同胞よ。然り吾さして生滅する同胞を観察せしめよ。

昨日は学校授業の用意のみにくらせり。今日も殆んど然り。

昨夜水谷真熊氏より来状あり上野賀勝君の結婚を報じ来る。今日返書す。今日石崎ため氏より来状直ちに返書す。

先達徳富氏より一書来る。中に紅葉二枚あり、書に曰くこれ松霞神社にまふでたる節紀念に取りかへりたる者なりと。則ちわざわざ送られたる也。又た先達写真送らる。

これは堅田方面を歩きまわった記である。十日の日曜日の朝れ時頃家を出て、あちこちの村々を訪ね歩いた。その村々の名はまだいちいち知らない。般頭河岸から渡し舟で渡って堅田道に出て、少し行って右に折れて三四ケ所の村を訪ねたとある。多分久部から長瀬、大久、龍護寺と行ったのであろう。番匠川と山の麓とが相接する処まで行って行き詰り、引きかえしたとあるから、龍護寺まで行って引きかえしたのであろう。あとがえりして、再び堅田道を通って柏江へ行っている。そしてなお進んで浜谷まで行って、県道に出て帰路に就いたと記してある。相変らず健脚の記である。

このあと、この行の感想を率直に書き綴ってある。村々を廻って色々観察したが、心の中に感じ得たものは何かを考えている。

見たものは、この大地の上に人間が生死する事実である。人間の生活の実際である。さまざまな村にはさまざまな人が住んでいる。その人達の生活はどうか、どんな運命をもっているか。どんな感情の所有者か。また、どんな美しい人情をもっているだろうかと色々想像する。

自分はどうしてこれらの村人として生まれなかったのか、自分の人生観、世界観が村々の人達と通じあって、どんな調和を保つことが出来ようか。

自分はこれから再々これらの村々を巡りたい。そこでは人間の生きた姿に接しられ、生々した強い印象を与えて呉れる。

村の人々の中には、罪悪もあるであろう。恋をしているものもあるであろう。こみ入った問題に悩んでいるものもあるであろう。自分にこの人々の現実の生の姿を、深く観察させて欲しいものだ。

以上のようにこの行に対して深い感慨さもって記してある。

徳富蘇峰氏より手紙が来て、その中に萩の松陰神社に詣でた際の記念として持ち帰った楓の葉き同封してあった。独歩はこの蘇峰氏の厚意に厚く感謝したことであろう。

石崎ためと云う人は山口県熊毛郡麻里村の石屋家の四女で、独歩が郷里に居た時分に大変世話になった家の娘である。この人と独歩とは交際があった。

十七日　日曜日

近来天甚だ寒く、月断く冷なり。

朝なゝ起き出でら見る冬景色

ぶらゝなすなく暮す此頃、なすなしと雖もなさんと欲するの熱情は愈々燃ゆる也。

昨日生徒を合手にナショナル第二を教え居たる時、突然自ら客観して思はず自笑せり。朽つる命、何を為さんとするぞ。

今朝めさめて頭を挙げてガラス越しに難山の背後朝輝の天に漲ぎるを望む忽然として感ずらく嗚呼、大なる美なる確かなる此自然、我は人なり、爾の中に生く、爾老ひず、吾豈に老ひんや、吾あに死せんやと

然り「自然」は一致なり、古来幾億の生命、此自然が吞吐したる現象に非ずや、吾も人なり、安ぜよ、吾甚だ独立を感ず然り吾甚だ吾がソールの独立を感ず

要するに吾ソールを此自然の中に見出すべ

ソール、ソール　汝は自由なり、自然なり、独立なり、

午前教会の帰りがけ城山の後背にめぐり例の坂を越へて帰宅す。杉の森のした陰を過ぐる時「自然」の動かざるゝこと甚だし。

「自然」甚だ親しく吾に近きぬ。

近頃は寒さが急に加わり、月はいよ〳〵冷やかに感じられる。朝起きて見ると、日増しに冬の荒涼さが身にしみる。毎日とりわけてすることもなく暮らしているが、心の中ではしなければならないと熱情に燃えている。

昨日学館で、生徒にナショナル巻二を教えているとき、急に自分で自分自身のことがおかしくなり、一人笑いをした。朽ち果ててしまうこの命は何をしようとしているのかと。

今朝目がさめて頭をあげてガラス越しに、難山のうしろから、朝日の光が空にみなぎっているのを眺めた。そして急に感じた。大きく美しく、しかもちゃんと実在しているこの自然。自分は人である。この自然の中に生きている。自然は老いないのにどうして自分は老いていくのか。どうして死んでしまうのか。

自然は一致調和しているのである。大昔から幾億とい

う生命が、この自然の中で生死しているのである。自分も人である。安心して自然にまかすべきである。自分は一人立ちの人間である。一人前の魂を持った人間である。要するに自分の魂をこの自然の中に見出すべきである。魂よ魂よ　お前は自由である。自然の中にあるのである。独立すべきである。

と、独歩は自然観、人生観を述べてある。

午前には教会堂に出席し、夜もまた出席した。そして感話した。

午前、教会からの帰りに、西谷、杉谷から白浜へと城山の背後を廻り、岡の谷の峠を越して帰宅した。杉の森の下を過ぎるとき、自然に強く心を動かされた。自然が親しく近ずいたと自分自身に感じた。

自然の中に溶け込もうとする独歩の気持のあらわれが解る。

十九日

昨日朝起き出でゝ著作の筆をとりそめぬ。

今井忠治氏より書状来る。直ちに返書を認む、中に曰く善かれ悪しかれこれ丈けは是非成し上げんと思ふと蓋し著作の謂ひも。

教場に出で業をとること例の如し

夜間、夜業を終へて月光を踏みて帰宅せり。自らの生存の偶然を感じ、吾が生れし時代の終に亦過ぎ去りて吾も亦た吾が自から古代を思ふ如く永来の人々より回顧せらるる可き命運の輪転の不思議の事実に打たる。自然の美は神の呼吸にして時の裏には永遠あり然らば神の下に吾は亡びざるも也。然らば過去の豪傑達も山間の樵夫の一人も亡びずして在る所にあるべし。厳然として在る可し。死の裏は生なり。

今朝早く起き出でて冷水もて体を拭き、雪の如き霜を踏むで蘆の堤より老松の馬場を散歩す。

今日はただ学校のためにいそがしかりし。

昨日（十八日）の朝起きると著作の筆を取り初めた。友人の今井忠治氏から手紙が来た。すぐ返事を書いた。その中に、自分はよかろうと悪かろうとこれは是非ともやり遂げようと堅く心に決めているものがある。それは著作することである。と書いた。独歩が文学者として身を立てようとする覚悟を持っていたことが解る。

教場に出て授業をしたことはいつもの通りである。夜この仕事を終えて月の光を踏んで帰った。道を歩きながら、自分がこの世にこうして生れ出たのは偶然であると感じ、自分が生れた今のこの世はやがては過ぎ去ってしまい、自分もまた自分が偲んでいる過去の人達と同じように、未来の人から回顧される人間となってしまう。その人間の運命の輪廻は、真に不思議な事実であることに強く心を打たれた。自然の美は神の呼吸であって、その呼吸の一刹々々の時は永遠につながっている。そうであれば自分という存在は決して亡びないものである。昔の英雄豪傑も、山間に住むきこりも亡びないで、あるところに生きているのである。きっと生きている。死のうらは生である。

独歩の人生観だろう。

今朝早く起きて冷水摩擦をし、雪のように白い霜を踏んで、四坪道から馬場通りを散歩した。今日も一日中学校のため忙しかった、と記してある。

（この稿おわり、以下稿を改めて）